



第91回 障子の張り替えに思うこと

▼ 障子というものを最近見なくなった。かくいう自分の暮らす家にも障子はひとつもない。だが、鳥取の実家には障子があって、居間の障子紙の破れが気になってしょうがないので、仕方なく自分で張り替えることにした。便利なことに、インターネットを検索すれば「障子の張り替え方」がでてくる。古い障子紙を湿らして、端からめくっていく。汚れた棧に布きんをあて、おもむろに糊をのせる。新しい障子紙をあて、はみ出た部分はカッターで切り取っていく。刃切れが悪いと濡れた紙が玉になり破れそうになる。自分で手を動かしてみると、細かな発見がたくさんあった。そういえば小さい頃、大晦日は家族総出の大掃除だった。天井の煤払い、障子の張り替え、廊下の水拭き。すべて自分たちの手仕事としてやっていた。

▼幸田文の父の思い出

幸田文は、父の露伴から家事一切の厳しい稽古を受けた。その思い出を「父・こんなこと」に書いている。そのなかに障子の張り替えがでてくる。「障子を池にぶちこむなど言語道断である。まずは道具からだ。障子紙をはがすのに、ござ一枚、小桶に水、水刷毛、灰汁、藁、木槌、新しい雑巾2枚、ゆがみのない4尺ほどの竹一本」とつづく。その後、露伴の障子の張り替えの情景が語られる。準備せられた道具が一分の隙もなく、無駄なく扱われ次々と張り替えがすすむ。その姿は簡潔にして見事である。露伴の稽古は、障子、糊、襖、唐紙、鉦、庭木、雑草、畠、とつづく。「畢竟、父の教えたことは技ではなくて、これ渾身ということであった。」面倒がる、出し惜しむ、そんな振る舞いはすべて完全に見捨てられるのだ。これを読みながら、私は亡き祖父のことを思い出していた。祖父は暇さえあれば庭へでて掃除をしていた。雑草を抜き、落ち葉を集め、日暮れまで一心に働く。私は不思議でたまらなかった。「なぜ、そこまで完璧にするのか、適当に手をぬけばよいのに」。そうではないのだ。祖父は「渾身で」庭を掃いていたのではないか、そんな気がする。

▼手ぬきしたものに愛着はない

ぴんとはった新しい障子紙を眺めながら、不思議な気持ちが湧いてきた。「大切にしたい一愛着」とでもいうのだろうか。これこそが、祖父が庭仕事に打ち込んでいた理由かもしれない。露伴が娘に厳しく稽古をつけた手仕事を貫く「渾身」という構え。「気持ちを出し惜しむケチな人間は見捨てられる。」手抜き、出し惜しみをした仕事に愛着はわいてこない。たとえささいな障子張りでも、日頃の稽古は、その人の何げない所作にあらわれるという。まことに、そら恐ろしいことである。



鳥取大学医学部
地域医療学講座
教授

谷口 晋一
(たにぐち しんいち)